

南明政権における童氏案について（4）

滝野 邦雄

⑧徐鼎

後の編纂であるが、徐鼎（字は彝舟，号は亦才。江蘇六合の人。嘉慶十五年（一八一〇）～同治元年（一八六二）。道光二十五年乙巳恩科（一八四五）三甲六十六名の進士）は、『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕に成る）において、これまで検討してきた諸書を総合して童氏事案についての経過と徐鼎自身の意見を述べる。

まず、この童氏事案の経過についてつぎのように記す。

明に婦人童氏有りて自から福王の妃なりと言う。錦衣衛の獄に下す。

初め王（福王弘光帝）の郡王と爲るや、黃氏を娶るも、早に卒す。世子と爲りて李氏を娶る。洛陽の變に遭いて亡くなる。嗣封の歳に童氏を封じて妃と爲す。一子を生むも育たず。已にして王（福王弘光帝）^{ママ①}藩を棄てて南奔し、太妃と妃（童氏）と各々人に依りて自活す。太妃の入るや、巡按（巡按河南監軍監察御史）の陳潛夫「妃 故より在り」と奏す。庶吉士の吳爾璵も亦た疏を附して之を^{もう}白す。王（福王弘光帝）召さず。妃（童氏）乃ち巡撫の越其^{そな}僣に詣り自から陳す。〔越〕其僣 劉良佐に會同（一緒に相談する）し、儀衛を具えて送りて京に至らしむ。王（福王弘光帝）怒り、^{とが}訶めて「妖婦」と爲し、錦衣衛に付して監候（極刑処分待ち）とす。妃（童氏）獄に在りて自から宮に入るの日月、相い離れるの情事を書して甚だ^{あき}晰らかなり。馬士英 曰く、「人 至情の關する所に非ざれば、誰か敢て陛下と敵體（夫婦であること）を稱せんや」と。王（福王弘光帝）又た顧みず。而して嚴刑を命じて之を拷す。妃（童氏）徒跣（裸足）もて號罵（罵り続ける）し、三日ならずして死す。王（福王弘光帝）怒りを〔陳〕潛夫・〔吳〕爾璵に遷し、並びに逮治（逮捕して処罰する）す（『小腆紀年附考』卷第九・「〔清世祖順治二年三月壬辰（初九日）〕明有婦人童氏自言福王妃。下錦衣衛獄」条）。

①福王弘光帝は、福王に封じられた時には、洛陽府ではなく懷慶府に仮住まいしていた。

はじめ王（福王弘光帝）が郡王となった時、黃氏を娶ったものはやくに亡くなる。福王の世子となって李氏を繼妃として娶った。李氏は洛陽王府陥落にあたって亡くなった。福王を継承した年に童氏をつぎの繼妃とした。一人の子供が生まれたが育たなかった。そうこうして福王弘光帝は仮住まいの地を出奔して南に向かい、太后と妃（童氏）とは人を頼って自活した。太后が南京に迎えられると、巡按河南監軍監察御史の陳潛夫は、「繼妃ももとより健在です」と奏上した。庶吉士の吳爾璵もまた上疏文を添えて申し上げた。ところが、福王弘光帝は妃（童氏）

を召し出さなかった。そこで、妃（童氏）は、巡撫の越其傑のところに行き自分から伝えた。越其傑は、藩鎮の劉良佐と一緒に相談して、儀衛を整えて南京に送り届けた。福王弘光帝は怒りとがめて、妃（童氏）を「妖婦」として、錦衣衛に下して、監候（極刑処分待ち）とした。妃（童氏）は、獄中でみずから王府に入った日にちや離れ離れになった事情などを書いた。それは、きわめてはっきりしたものであった。馬士英は、「人は本心からでなければ、だれが陛下と夫婦であったと称するであろうか」といった。それでも、福王弘光帝は顧みることはなく、厳刑処分を命じて拷問にかけた。妃（童氏）は裸足にされながら罵り続けて、三日たらずで亡くなった。福王弘光帝は怒りの矛先を陳潛夫・吳爾壘に向け、二人を逮捕して処罰した、という。それに続いて、徐鼎はつぎのような意見を書いている。

徐鼎 曰く、書して「婦人の自稱する有り」と曰うは何ぞ。疑詞^①なり。童氏の事 疑う可きか、疑う可き無きなり。天下の至りて頑劣の婦も、未だ冒^{いつわ}りて人の妻と爲る者有るを聞かず、況んや天子の尊・宮禁の嚴なるを以てをや。已む無ければ、則ち或いは其れ瘋顛（精神錯乱）なり。而して[陳]潛夫・[越]其杰・[吳]爾壘・[劉]良佐諸人 心疾有るに非ず。奈何ぞ瘋顛の婦人を以て之を奏聞し、儀衛もて之を送り、道に伏して之に謁せんや。且^{そも}も即ち僞なるや、亦た必ず入宮し面見し、而して後に之を知る。即ち然らざれば、亦た必ず召して太后の宮に入れ、從行（隨行）する閹人を集めて審驗（事実を確かめる）し、而して之を知る。豈に未だ見えず、而して其の僞を逆知（あらかじめ知る）し、乍ち[報告を]聞きて而して遽に其の人を怒（厳しく責める）る者ならんや。吾（徐鼎）固より太子の僞に於いては未だ敢えて之を質言（実情に照らして言う）せず。而れども童氏の事に於いては、則ち疑うこと無きなり。疑うこと無ければ則ち曷爲れぞ疑詞有らん。曰く「蓋し其れ愼むならん（愼んでいるのである）」なり。^②夫れ人情は夫婦の間に於いては、往往に曖昧にして人に告ぐ可からざるの事有り。吾（徐鼎）烏^{いず}くんぞ王（福王弘光帝）の斥^{こぼ}みて「妖婦」と爲すを知らん。[童]氏に深怒積怨有るに非ざれば、故^{ことさら}に之を聞き遽^{にわか}に怒り、之を怒（厳しく責める）りて遽に殺さんや。故に仍お之を疑い、「蓋し其れ愼むならん」。而して或いは童氏の僞ならずを信じて、而して轉じて福王の僞なるかと疑う者有り。之を疑う者の説に曰く、「糟糠の故配、患難 相い依り、何れの大過有りて、而して必ず諸を死地に置かん。始め太妃の至るに於いて、金錢を括取（掠奪）し、以て其の驩（歡心）を邀む。殆んど妃（童氏）の入りにて機關（策略）を識破するを恐れ、故に急ぎて其の口を滅（口封じ）するなり」と。又た一説に曰く、「此れ馬瑤草（馬士英）迎立を詭謀（悪だくみ）するも、[擁立した人物は]本とより明室の宗支（明朝の一族）に非ざるなり」と。夫れ母子・夫妻の情は一なり。人の子を冒^{いつわ}りて以て帝と爲すと人の夫を冒^{いつわ}りて以て帝と爲すとは、其の事 亦た同じきなり。何ぞ其の母の識破を畏れずして金錢もて之を結び、獨り其の妻の是の如くするを畏れんや。且つ[馬]士英の迎立は、[呂]不韋・李園の謀有るに非ざるなり。擁戴を以て居功（自分の功績）とせんと欲するに過ぎざるのみ。是の時、宗室の流

離する者、計^{かぞ}うるに勝^たう可からず。何人も擁戴す可からずして、必ず誰何（誰なのか）を知らざるの人を取りて之を爲さんや。況んや堂堂たる留都、史閣部（史可法）・高膠州（高弘圖）諸賢の定策（大臣等が天子を立てることを謀る）を以てし、名賢 林立し、勳戚 朝に満つ。而^{しか}して使^{しか}卜者の王郎 踐祚し纂統す（即位して帝統を継ぐ）とす。是の理有らん^④や。是れ皆な疾むの已に甚しきの詞にして、獨夫（暴君）と爲る者の宜しく戒しむ所なり（『小腆紀年附考』 卷第九・「[清世祖順治二年三月壬辰（初九日）] 明有婦人童氏自言福王妃。下錦衣衛獄」条）。

①疑辭：『春秋穀梁傳』 桓公十五年と宣公元年に「疑辭也」とあり、「逡巡した表現」という意味で用いられる。

②『史記』 孔子世家に「蓋其慎也（蓋し其れ慎むならん）」とあり、その「索隱」に「……是其謹慎也（是れ其れ謹慎するなり）」とあるのによる。

③『史記』 樂毅列傳に「我有積怨深怒於齊，不量輕弱，而欲以齊爲事（我 齊に積怨深怒有れば，輕弱を量らず，齊を以て事を爲さんと欲す）」。

④全祖望は、福王弘光帝が偽物であるという立場から、「題戾園疑跡三」で「福王之亦た偽なるが若きは、則ち『所知錄』に見ゆ。而るに予（全祖望） 林太常（林時對）の『塵菴集』中を見るに、之を『所知錄』に較べて尤^{とく}に詳し。則ち益々奇なり。堂堂たる留都 以史大司馬の定策を以てし、且つ名賢 其の間に林立す。而るに使^{しか}卜者の王郎が輩、天子の位を踐む。豈に怪事に非ずや」（『鮚埼亭集外編』 卷二十九・題跋三・「題戾園疑跡三」）と記している。おそらく徐鼎は、この箇所を参考にしたと推測できる。

私（徐鼎）が「婦人の自稱する有り」と記したのは何故か。それは、疑詞（逡巡した表現）を用いたからである。童氏の事案は、疑うべきであろうか。いや、疑うべきものではないのである。世の中の極めて無知な女性であっても、いまだに偽って人の妻子であるという者がいるとは聞いたことがない。まして、天子の尊（天子の尊貴）・宮禁の嚴（宮中の厳密）にあってはなおさらである。無理にこじつけるならば、そうした女性は精神が錯乱しているのであろう。さらには、童氏の話信じた陳潛夫・越其杰・吳爾壘・劉良佐などの人たちは、精神を病んでいるわけではない。どうして精神が錯乱した女性を報告し、儀仗を整えて送り届け、路上で拝謁するのだろうか。そもそも偽りであるのならば、宮中で拝謁したらその真偽が分かるものである。もしもそうでないならば、召し出して太后のところに入れ、随行する宦官を集めて事実を確かめたら分かるものである。どうして面会せずに、あらかじめ偽物だと判断し、童氏についての報告を聞くとすぐにあわててその女性を譴責することがあるのだろうか。私（徐鼎）は、もともと偽太子事案についてはあえて実情に照らして言わない。だが、童氏の事については疑ってはいない。疑っていないのならば、どうして「疑詞（逡巡した表現）」を用いたのか。それは、「蓋し其れ慎むならん（慎んでいるのである）」。そもそも人間の気持ちというもの、往々にして曖昧ではっきりと告げることができないことがある。私（徐鼎）がどうして福王弘光帝が童氏を拒んで「妖婦」だとしたのかが分かるであろうか。童氏に対して非常に深い憎悪があ

るのでなければ、ことさら童氏の事を聞いて急に譴責し、厳しく責めて急いで殺害するであろうか。こうしたことからなおも疑い、「蓋し其れ愼むならん（愼んでいるのである）」とするのである。さらには、童氏がほんとうの継妃であることを信じて、かえって福王弘光帝が偽物ではないかと疑うものがある。そうした立場の者の考えでは、「糟糠の妃で、苦難を共にしたものを、どのような重大な過失があつて、それを死地に追い込むのであろうか。はじめ太后がやってきた時、[福王弘光帝は、自分が偽物であることを知られるのを恐れて] 金銭をかき集めて[太后に贈り]、太后の歡心を得ようとした。おそらく妃（童氏）が宮中に入り、その策略を暴き立てることを恐れて、急いで口封じを行なったのであろう」という。また別の説明では、「これは馬瑤草（馬士英）が擁立をたくらみ[取り仕切った]ものであり、もとより擁立した人物は明朝の一族ではない」という。そもそも母子の間の感情と夫婦の間の感情とは同じものである。人の子供を偽称して皇帝とすることと人の夫を偽称して皇帝であるとするのは、やはり同じことである。福王弘光帝自身が偽者ならば、どうしてその母親（太后）に見破られることを恐れず、金銭で話をつけながら、その妻が見破ることだけを恐れたのであろうか。そのうえ、馬士英の福王弘光帝の擁立は、[不義の子を秦王に擁立した] 呂不韋や、[やはり不義の子を楚王に擁立した戦国末の] 李園の謀略があつたわけではない。擁立することでその功績を手にしたいと望んだにすぎないのである。この時、明朝の王族で離散していた者は、数えきれないほどであつた。そうした王族の誰も擁立することができず、ぜひともどこかの見知らぬ人物を探し出して擁立するものだろうか。ましてや壮大な南京で、史可法・高弘圖などの賢者が擁立を定め、そのうえ名賢が林立し、勳戚が宮中にたくさんいたのである。使卜者の王郎が[偽者の福王弘光帝として] 即位して帝統を継いだなどといっている。[はたして]、こうした道理があるのだろうか。これらはすべてはなはだしく忌むべき発言である。暴君の戒めとすべきものである、という。

では、続けて明朝の制度から福王弘光帝の「妃」であつた可能性について検討してみたい。

(3)

すでに検討したように、福王弘光帝は童氏が「妃」でないと否定するにあたっての釈明は、『南渡録』が伝えるように、

……旨に言う「朕（福王弘光帝）の前后黄[氏は] 早夭（若くして亡くなる）し、継妃の李[氏は] 殉難す。[ふたりは] 俱に^す經に追諡（諡號を贈る）す。且つ朕（福王弘光帝）の先は郡王爲り。何ぞ東西の二宮有らん……（『南渡録』卷之六・「弘光元年（順治二年）三月丙午（二十三日）」条）。

というものであつた。

つまり、

①福王弘光帝は庶子であったため郡王であった。

②郡王の身分では、同時にふたりの妃を持てない。最初の正妃黄氏は早世し、繼妃の李氏は洛陽府陥落の時に亡くなった。

に要約できるかと思う。そこで、この二点について主に明朝の制度から検討し、関わりがあったと童氏が主張する洛陽王府陥落から南京に現れる直前までの間の福王弘光帝の行状について考えてみたい。

①郡王

郡王とは、親王の次嫡子や庶子が封じられる。

〔洪武二十八年八月〕戊子（二十七日）、詔もて皇太子・親王等の封爵・冊寶の制を更定す……親王の嫡長子は年十歳にして授くるに金冊・金寶（金印）を以てし、立てて王世子と為す。次嫡子及び庶子は年十歳にして皆な郡王に封じ、授くるに塗金の銀冊・銀印を以てす。凡そ王世子は必ず嫡長を以てす。如し或いは庶を以て嫡を奪えば、輕ければ則ち降して庶人と為し、重ければ則ち遠方に流竄（りゅうざん）（追放）す。若し王 年三十にして正妃 未だ嫡子有らざるも、其の庶子は止だ郡王と為し、王と正妃の年五十の嫡子無きを待ちて、始めて庶長子を立てて王世子と為す……著して令と為せ（『大明太祖聖神文武欽明啟運俊德成功統天大孝高皇帝實錄』卷之二百四十・「洪武二十八年八月戊子（二十七日）」条）。

洪武二十八年八月二十七日に詔を出して皇太子・親王などの封爵・冊寶の制度を更定する。親王の嫡長子は十歳になれば、金冊・金寶（金印）を授けて王世子とする。長子でない嫡男や庶子は十歳になれば、郡王に封ぜられて塗金の銀冊と銀印を授けられる。すべての王世子は、必ず嫡長子を充てる。もしも庶子が嫡子の地位を奪ったならば、罪状が軽い場合は庶民とし、重い場合は遠方に追放する。もしも、親王が三十歳になって、正妃に嫡子がいない場合も、庶子はまだ郡王とし、親王と正妃とが五十歳になり、嫡子がいないという段階になってはじめて庶長子を王世子とする、という。

また、『明史』もつぎのように言う。

明制、皇子は親王に封ぜられ、金冊・金寶（金印）と歳祿萬石を受け、府に官屬（属官）を置く。……親王の嫡長子は、年十歳に及べば則ち金冊・金寶（金印）を授けられ、立てて王世子と爲る……諸子は年十歳なれば則ち塗金の銀冊・銀寶（銀印）を授けられ、封じて郡王と爲る（『明史』卷一百十六・列傳第四・諸王）。

皇子は、親王に封ぜられ、金冊・金寶（金印）と一萬石の歳祿を授けられ、王府に属官を置いた。親王の嫡長子は十歳になれば、金冊・金寶（金印）を授けられて、王世子に立てられる。親王の庶子は、十歳になれば、塗金の銀冊と銀寶（銀印）を授けられて、郡王に封ぜられる、と説明する。

この規定どおり、萬曆三十五年十月二十四日（西曆：一六〇七年十二月二十四日）に生まれた福王朱常洵の第一子で庶子の福王弘光帝（朱由崧）は、十年後の萬曆四十五年二月十五日に德昌王に封ぜられている。

〔萬曆四十五年二月〕庚戌（十五日）福王〔朱〕常洵の庶一子〔朱〕由崧を封じて德昌王と爲す（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之五百五十四・「萬曆四十五年二月庚戌（十五日）」条）。

萬曆四十五年三月十八日には、福王弘光帝（朱由崧）のために麒麟鈕（麒麟の形をしたつまみ）の鍍金した印（銀印）を鑄造する。

〔萬曆四十五年三月癸未（十八日）〕福王庶第一子の德昌王〔朱〕由崧に麒麟鈕（麒麟の形をしたつまみ）の鍍金印を鑄造す（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之五百五十五・「萬曆四十五年三月癸未（十八日）」条）。

こうして、萬曆四十五年六月九日に「福府德昌王」に冊封される（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之五百五十八・「萬曆四十五年六月壬寅（九日）」条による）。

いまのところ、はっきりとした記録は見出せないが、「王と正妃が五十歳になっても嫡子がない場合は、庶長子を王世子とする」という規定からすると、庶長子の福王弘光帝（朱由崧）が王世子に封ぜられたのは、崇禎八年（一六三五年）前後だと推測できる。なぜならば、萬曆『實錄』によれば、福王弘光帝（朱由崧）の父親の福王朱常洵は、萬曆十四年正月五日（西曆：一五八六年二月二十二日）に生まれているからである。

〔萬曆十四年正月〕庚子（五日）、皇第三子（福王朱常洵）生る（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之一百七十・「萬曆十四年正月庚子（五日）」条）。

そして、洛陽府陥落の後、父の福王（福王朱常洵）の服喪の期間が過ぎて、崇禎十六年五月二十一日（西曆：一六四三年七月六日）に福王を嗣いでいる。

〔崇禎十六年五月〕癸丑（二十一日）……福世子〔朱〕由崧 福王を嗣ぐ（『國榷』卷九十九・「崇禎十六年五月癸丑（二十一日）」条・五九七七頁）。

②妃

もともと親王・郡王の正妃は一人であり、繼配を娶るについては、つぎのような規定があった。

凡そ繼配を選娶するは、萬曆十年に議准（提案された内容について皇帝が裁可を与える）するに、凡そ親〔王〕・郡王の妃 病故し、而して未だ子有らざる者は、選繼を奏請するを許す天順四年例……と（萬曆『大明會典』卷之五十七・禮部十五・王國禮三 婚姻儀賓婚配及奏式附・五葉）。

「繼配を選娶する」ということについては、「天順四年例」を踏まえて萬曆十年に裁可された規定で、親王・郡王の妃が病没して、まだ子供がいない者は、「繼妃」を娶ることを要請すること

を認める、という。

最初の妃の黄氏が早世した福王弘光帝（朱由崧）は、この規定通りに、李氏を繼妃として娶った。この繼妃李氏は、崇禎十四年一月二十五日（西暦：一六四一年三月二十五日）の洛陽王府陥落の混乱の中で自裁する。

このように規定上からしても、「黄氏」と「李氏」という二人の妃が同時にいたわけではなかった。福王弘光帝は規定に従って妃を娶っていたのである。

もし童氏が福王弘光帝の「繼妃」に封ぜられたのならば、繼妃の李氏が亡くなった洛陽王府陥落時の崇禎十四年一月二十五日（西暦：一六四一年三月二十五日）から福王弘光帝が避難先の懷慶を脱出した崇禎十七年二月十六日までの懷慶滞在中のことになる。ただし、萬曆『大明會典』によると、親王の喪が報告（奏上）されると、

親王世子世孫附

〔親王の〕喪 聞し・・・王妃・世子・衆子及び郡王・郡主^①より下の宮人（妃嬪、宮女）に至るまで、俱に斬衰三年なり・・・（萬曆『大明會典』卷之九十八・禮部五十六・喪禮三・「親王世子世孫附」条・十一葉）。

①『明史』卷一百二十一・列傳第九・「公主」に「親王の女を「郡主」と曰う」。

とあり、王妃・世子・衆子（世子以下の嫡出の子供）及び郡王（庶子）・郡主（親王の娘）より下の宮人にいたるまですべて斬衰三年の喪に服することになっていた。

また、『宗藩條例』によると、服喪の期間が過ぎると、はじめて親王・郡王に封ぜられることを申請するのが定例であるという。

各府の親〔王〕・郡王 病故すれば、其の子 暫く府事を^{おさ}理め、服の満つるを待ち、封を請う。此れ定例なり（『宗藩條例』卷上・「親王襲封」条・十七葉）。

明朝での斬衰三年は二十七ヶ月とされていた。つまり、洛陽陥落の崇禎十四年一月二十五日（西暦：一六四一年三月二十五日）から、福王弘光帝（朱由崧）が福王に封ぜられる崇禎十六年五月二十一日（西暦：一六四三年七月六日）までは、父親の福王朱常洵の服喪の斬衰三年（二十七ヶ月）の期間であったと考えられる。当然、服喪中に繼妃李氏のつぎの「繼妃」を娶ることはできなかった。すると、新たに「繼妃」を娶ることができたのは福王に封ぜられた崇禎十六年五月二十一日（西暦：一六四三年七月六日）から懷慶を脱出した崇禎十七年二月十六日（西暦：一六四四年三月二十四日）までの十ヶ月の期間となる。童氏が「繼妃」に封ぜられたとするのならば、その十ヶ月の間に「繼妃」の申請を行ない、承認されたことになる。

また、この十ヶ月の間に「繼妃」に封ぜられなくても、童氏に男子がいたのならば、「繼妃」・「次妃」に封じられた可能性もないことはない。男子が「親王」または「郡王」となった場合、生母はそれぞれ「繼妃」・「次妃」に封ぜられる規定があるからである。

親王の生母は封じて「繼妃」と為す。郡王の生母は封じて「次妃」と為す（『宗藩條例』卷上・「請封生母」条・五十七葉）。

ただこれも、男子が十歳になって「世子」・「郡王」に封ぜられてからのことであるので、遅くとも崇禎七年までには子供が生まれていなくてはならない。しかしながら、高名衡（字は平仲，号は鷺磯。山東沂水の人。崇禎四年辛未科（一六三一）三甲二百四十名の進士）の陥落した洛陽城の現地調査報告には、福王弘光帝の男子についてまったく言及がないので、男子がいた可能性は低いのではないかと考えられる。

では、妃ではないが身边で奉仕した「選侍（妾）」だとしたらどうだろうか。親王・郡王について、つぎのような規定があった。

世子・郡王 選婚の後、年二十五歳にして嫡配の出づる無ければ、親王に具啓して長史司に轉奏し、巡按御史に^よりて申呈（上行文書を提出して報告）し、覈實（事実確認する）し具奏（奏本を作成して呈進する）す。[そして]良家女の内に於いて二人を選娶す。以後、嫡庶に拘わらず、生れて子有るが如ければ則ち[この]二妾に止む。三十歳に至り、復た出づること無ければ、方に前[の手続き]に仍りて具奏し、選し足して四妾とするを許す^①……（萬曆『大明會典』卷之五十七・禮部十五・王國禮三 婚姻儀賓婚配及奏式附・十二葉）。

①萬曆『大明會典』（萬曆『大明會典』卷之五十七・禮部十五・王國禮三 婚姻儀賓婚配及奏式附・十一葉）に、「萬曆十年、議准するに凡そ親王の妾媵は、奏して選ぶを許すに、一次に多き者は十人に止む。世子及び郡王は額妾四人なり……」とあるによる。

世子・郡王は、妃を定めてから二十五歳になって、嫡出の子供がなければ、親王に申請文書を提出し、王府の長史司が取り次いで、巡按御史を通して報告してもらい、史実を確認して奏上する。そして良家の女性から二人を選ぶ。以後、嫡出・庶出にかかわらず、子供が生まれて生育したのならば、この二人に止める。三十歳になって、まだ子供がいなければ、前のような手続きで奏上し、[二人を足して]四人にすることを認める、とある。

洛陽王府が陥落した時、福王弘光帝は三十歳を超えていて、子供もいなかったようだ。そのため、規定によれば、二十五歳の時の二人に加えて、さらに二人を「選侍（妾）」として娶ることができた。童氏が王府に入り、福王弘光帝に仕えたとしたならば、この四人の中のひとりであった可能性もある。ただし、「妃」ではない。

また、(1)で検討した李清の『南渡録』や顧苓の『金陵野鈔』では、童氏は十七歳の天啓六年（一六二五年）に福王府に入ったという。天啓六年（一六二五年）という、福王弘光帝はまだ郡王で数え年二十歳であった（福王弘光帝は萬曆三十五年十月二十四日（西暦：一六〇七年十二月二十四日）に生まれる）。すると規定どおりだと、童氏は福王府に「選侍（妾）」として「入宮」したわけではなかった。規定では、この天啓六年（一六二五年）に福王弘光帝は正式な「選侍（妾）」を置くことができなかったからである。

このように規定から考えると、もし童氏が「繼妃」に封じられたとしたのならば、崇禎十六年五月二十一日（西暦：一六四三年七月六日）から崇禎十七年二月三日（西暦：一六四四年三

月十四日)までのほぼ七ヶ月の間のこととなる。また、子供が生まれたために「妃」に封ぜられたならば、崇禎七年までには子供が生まれていなくてはならない。ただ、「妃」ではないが「選侍(妾)」であれば可能性があるが、童氏が天啓六年(一六二五年)に福王府に入り、すぐに「選侍(妾)」のような立場に封ぜられたとしても、規定上の「選侍(妾)」である可能性はないようだ。しかし、福王弘光帝が二十五歳になった崇禎四年(一六三一年)以後だと、規定上の「選侍(妾)」に封ぜられた可能性はある。付け加えると、高名衡の洛陽城の現地調査報告に、福王世子由崧の「選侍(妾)」については、まったく言及がない。

③福王弘光帝(朱由崧)の行状

洛陽城が陥落してからの福王弘光帝(朱由崧)の行状について、高名衡(字は平仲、号は鷺磯。山東沂水の人。崇禎四年辛未科(一六三一)三甲二百四十名の進士)の陥落した洛陽城の現地調査報告に、「福王世子由崧の繼妃の李氏、福王(常洵)の選侍の孟氏・蕭氏・李氏などや、乳保(乳母)の劉氏および内執事の二十餘人は、二十日の夜に投縊(自縊)しました。そして燃やされてしまったので、すべて弁別できません。ただ福王(常洵)妃の鄒氏は、何度も殉じようとしたもののうまくゆかず、苦勞して転々とし、河北にたどりつき保護されました。福王世子由崧の冊・寶はまた幸いにも残っていて保存されております。しかし福王世子の由崧は、子女(仕える女性のことか)がおらず、離散して落ち着くところがなく孤独で苦しんでおられます。いまはただ母と子とが寄せ合っているだけの状態です。ほんとうにかわいそうなことです」という。

其れ世子(朱由崧)の繼妃李氏、福王(朱常洵)の選侍の孟氏・蕭氏・李氏等、乳保(乳母)の劉氏及び内執事の二十餘人 俱に二十日夜に于いて、投縊(自縊)す。[そして] 焚屍を被り、皆な辨(弁別)し難し。惟だ福王(常洵)妃の鄒氏 屢しば身を以て殉ずるも、竟に死するを獲ず。顛沛(苦勞して)に間關(輾轉)として河北に扶傷(傷ついた人を扶助する)さる、而して世子(由崧)の冊・寶 亦た幸いに見在(生存)し保護さる。然れども世子(由崧) 亦た尙お子女無く、流離し孤苦(孤独で困苦)す。惟だ母子の相い依る有るのみ。誠に悲しむ可し(『明清史料』壬編・第五本・「細察失領(雒)根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本・四一三頁)。

父親の福王朱常洵の喪に服さなければならない時期の世子(由崧)を「亦た尙お子女無く、流離し孤苦(孤独で困苦)す。惟だ母子の相い依る有るのみ。誠に悲しむ可し(福王世子の由崧さまは、子女(仕える女性のことか?)がおらず、離散して落ち着くところがなく孤独で苦しんでおられます。いまはただ母と子とが寄せ合っているだけの状態です。ほんとうにかわいそうなことです)」と高名衡は、報告しているのである。

『國權』によると、崇禎帝は崇禎十四年二月二十四日に閣部を召し出しつぎのようなことを質

問している。

〔福王府が陥落し、福王常洵が殺害されたとの報告があり、崇禎十四年二月〕己巳（二十四日）、閣臣の范復粹・張四知・謝陞・魏照乘・陳演、禮部尚書の林欲楫、侍郎の王錫宸・蔣德璟、兵部尚書の陳新甲、禮科都給事中の葉高標、戸科右給事中の章正宸、禮科右給事中の李焞、給事中の陰潤・周正儒、兵科都給事中の張縉彥、駙馬都尉の冉興讓等を乾清宮の左室に召す・・・〔張〕縉彥の疏を出し、巡按河南の高名衡の疏の内に引く福世子由崧の渝禮^①に及ぶ。〔張〕縉彥曰く、「臣は河南の人なり。聞く福世子 孟縣に逃る。縣人の郭必信 来る。故に之を悉す」と。上（崇禎帝）曰く、「〔郭〕必信 何と云う」と。曰く、「〔郭〕必信 世子の衰服（喪服を着る）するを見。且つ遇害の日 内員の環りて泣きて去らず有り」と。問う「内員は何れの名〔前〕なるや」と。曰く、「崔升なり」と。問う「世子は若何」と。曰く、「世子は衣 蔽體（身に着ける）せず、尙お王府官數人、校尉三四十人を従う」と・・・（『國榷』卷九十七・「崇禎十四年二月己巳（二十四日）」条・五八八九頁）。

①「渝禮」について、いまのところほかに用例が見当たらないので、解釈しにくい。ここは、「渝」を「違背」の意味だと考え、「福世子由崧は禮に反する行為を行っていた」と理解した。

崇禎十四年二月二十四日、崇禎帝は、閣臣の范復粹・張四知・謝陞・魏照乘・陳演、禮部尚書の林欲楫、侍郎の王錫宸・蔣德璟、兵部尚書の陳新甲、禮科都給事中の葉高標、戸科右給事中の章正宸、禮科右給事中の李焞、給事中陰潤・周正儒、兵科都給事中の張縉彥、駙馬都尉の冉興讓などを乾清宮の左室に召しだした。崇禎帝は、張縉彥の奏上文を取りだし、河南巡按の高名衡の疏文の中で言及される福王の世子由崧の「渝禮（禮に反する行為を行なう）」のことに話題が及んだ。張縉彥は、「私は河南出身でございます。福王の世子由崧さまは、孟縣に避難されたと聞いております。このことは、縣から郭必信がやってまいりまして、事の次第をわかっております」という。崇禎帝は、「郭必信はどのように言っていたのか」という。張縉彥は、「福王の世子由崧が喪服を着ておられたのを見たとのことです。また、福王常洵が殺害された日、宦官が側に立って泣いて立ち去らなかった」という。崇禎帝は、「宦官は、どのような名前なのか」と質問する。すると、「崔升です」と答える。崇禎帝は、「福王の世子由崧は、どうしているのか」という。「福王の世子由崧は、裸同然でございました。なお福王府の役人が数人と、校尉三四十人を従えておられます」という。

河南巡按の高名衡の上奏文の中で福王の世子朱由崧が「渝禮（禮に反する行為を行っていた）」ということが述べられていたが、張縉彥はそれを否定した、というのである。

河南巡按の高名衡の上奏文がいま検討した「細察失領（雒）根因并城内情形據實奏聞仰乞聖鑒」題本を指しているのであれば、「世子（朱由崧）亦た尙お子女無く、流離し孤苦す（福王世子の由崧さまは、子女（仕える女性のことか？）がおらず、離散して落ち着くところがなく孤独で苦しんでおられます。いまはただ母と子とが寄せ合っているだけの状態です）」というの

がそれに相当するのだろうか。いまのところ『國権』以外には、この記事は見当たらないので（『三朝野記』巻六にもこの時の対話が記されているが、上奏文についてのやりとりは記載されていない）よく分からないが、服喪の期間に女性を近づけたという別の上奏文があったのであろうか。

否定はされたものの、この「渝禮（禮に反する行為を行っていた）」が、服喪期間中に身辺に女性を近づけたことを意味し、またそれが真実であったとしたならば、「繼妃」や「次妃」や「選侍（妾）」でないものの、福王弘光帝の身辺で奉仕した女性がいた可能性がある。そして、それが童氏であったという可能性はなくもない。

ただ、童氏の供述や諸書で福王弘光帝と出会った場所として言及されるのは、黄河以南の尉氏縣である。また童氏の供述には福王弘光帝が避難していた懷慶の地名はでてこない。

さらに尉氏縣は、康熙『開封府志』に、

尉氏縣

崇禎十四年冬、流寇 城を陥れ、殺戮焚燬し殆ど盡く（康熙『開封府志』卷之三十九・兵變・明・「尉氏」条・十七葉）。

とあり、道光『尉氏縣志』にも、

〔崇禎十四年〕十二月十九日、闖賊 縣城を破り、殺擄（殺したり捕らえたり）焚燬（焼毀）し殆ど盡く（道光『尉氏縣志』卷一・星野志附祥異・「崇禎十四年」条・七十二葉）。と記される。尉氏縣は、崇禎十四年十二月十九日に流賊に攻略されて「殆ど盡く」という状態であったようだ。

また、道光『尉氏縣志』には、

〔崇禎〕十五年、理問（布政使司直属の官員）の孫接武 方に修城せんとするに、復た賊の爲に折毀さる（道光『尉氏縣志』卷一・星野志附祥異・「崇禎十五年」条・七十二葉）。とある。崇禎十五年に毀された城を修復しようとしたものの、また流賊によって壊されたというのである。

こうしたことからしても、「殆ど盡く」となった尉氏縣において、童氏と福王弘光帝とがかかわりを持ったようには考えられない。

さらに、『淮城日記』には、福王弘光帝が潞王朱常淐たちとともに淮安に現われ、避難先の懷慶から脱出した時のことを説明した発言が記されている。

〔崇禎十七年三月八日〕・・・福王の船は〔潞王朱常淐の船にくらべて〕更に小さく、宮眷（后妃）無し。兩公（路振飛・朱國弼）〔福〕王の受驚（難事に直面したこと）を慰む。〔そして〕逃ぐるの故を問う。〔福〕王〔以下のように〕曰う、「孤（私：福王由崧の自称）河南の亂れてより後、國母と懷慶に寄居す。二月十六日夜間、忽然と變ありと聞き、四門の火 起こる。孤（私：福王由崧の自称）と國母と便衣（平服）もて出走し、行きて東門に至る。門 閉じらる。張守道有りて門を開き、逃ぐ。孤（福王由崧の自称） 方に出るを

得るに、忽ち國母の在る所を失う。孤（私：福王由崧の自称）今此に至るを得るも、國母未だ何れの處なるかを知らず」と。側邊の一内官云う、「殿下 國母に因りて哭する^{もの}的なり」と。乾了（哭し終わり）、王（福王）又た云う、「身上の衣服は皆な是れ潞王の送りし^{もの}的なり」と。別れし後、軍門（路振飛）銀六十兩を送り、王（福王）に衣を改めるを爲さしむ（光緒十二年（一八八六）南清河王氏小方壺齋刊（崇禎十七年八月自跋）『淮城日記』全一卷・「三月初八日」条・二葉～三葉）。

福王弘光帝の船は〔潞王朱常淐の船にくらべて〕さらに小さく、宮眷（后妃）無し。兩公（路振飛・朱國弼）は、福王弘光帝が避難先の懷慶で難事に遭ったことを慰めた。そして避難してきた理由を尋ねた。福王は「孤（福王朱由崧）は、河南が混乱してからは、父親の福王（朱常洵）妃であった鄒氏とともに懷慶に避難していた。この〔崇禎十七年〕二月十六日になって、にわかに変乱の知らせを聞き、懷慶城の四つの城門が火災になった。福王朱由崧は母妃鄒氏とともに平服で逃げ出し、東門にたどり着いたが、門は閉じられていた。張守道がいて、門を開いてくれて逃げた。孤（福王朱由崧）は、脱出することができたが、知らない間に母妃鄒氏の居所がわからなくなった。孤（福王朱由崧）は、今ここに来ることができたが、母妃鄒氏はいまだにどこにいるのか分からない」という。側にいた宦官が、「殿下（福王朱由崧）は、母妃鄒氏のために声を出して泣いておられます」と言う。哭することが終わり、また「今着ている衣服は、潞王朱常淐が贈ってくれたものである」と言う。面会の後、軍門（路振飛）は、福王朱由崧に銀六十兩を送り届け、衣服を新しくするようにしてもらった、という。

『淮城日記』の伝える所によると、福王弘光帝は、崇禎十七年二月十六日まで懷慶に避難していた。懷慶が陥落すると逃げ出し、母妃鄒氏と行き別れになり、身の回りに女性を連れず、着の身着のままで淮安に到着したというのである。

母妃鄒氏については言及されるが、妃については何も述べていないことからしても、懷慶では新しく妃を娶ったことはなかったのではないだろうか。また、「孤（私：福王由崧の自称）河南の亂れてより後、國母と懷慶に寄居す」とあることからすると、洛陽王府が陥落してからずっと懷慶に避難していて、懷慶以外では童氏と知り合う機会はなかったと推測できる。さらにいうと、二月十六日に懷慶を出て、三月八日に淮安に到着する逃避行中に童氏と知り合い連れて行くことはできなかったかと考えられる。『淮城日記』に「福王の船は〔潞王朱常淐の船にくらべて〕更に小さく、宮眷（后妃）無し」と記されているからである。

おわりに

文秉（字は蓀符、号は竺陽山人。江蘇長洲の人。萬曆三十七年（一六〇九）～康熙八年（一六六九）二月。六十一歳で卒す。國子監生）は、『甲乙事案』において、まず事実関係をつぎのように伝えたのち、コメントをつける。

丙申（十三日）、宮眷の童氏を錦衣の獄に下す。

初め、上（福王弘光帝）郡王と爲り、妃黃氏を娶るも、早逝す。既にして世子と爲り、李氏を繼妃とす。〔繼妃李氏は〕、洛陽の變ありて、又た亡くなる。童氏 或いは「妃」と云い、或いは「司寢^①」と云う。曾て一子を生むに與かるも、育たず。〔福王弘光帝が〕藩を棄てて南奔するに及び、太妃と〔童〕氏とは各々人に依りて自活す。太妃 南（南京）に來る。〔それにあわせて〕巡按の陳潛夫〔童氏のことを〕奏聞するも、上（福王弘光帝）召さず。是^②に至り〔童氏は〕自から越其杰の所に詣る。〔越〕其杰 再び疏す。即ち奉けたる「假冒（詐称）〔である〕」との旨もて、着して驅逐せしむ。而れども必ず自から〔南〕京に至るを請わんと欲す。至るに及び、上（福王弘光帝）大いに怒り、之を獄に下す。拷訊（厳しい取り調べ）を備受するも、終に異詞無し。又た細かに宮に入るの年月及び日と聚散するの情事を書して甚だ悉くす。〔そして、取り調べた〕馮可宗に上（福王弘光帝）に達するを求む。上（福王弘光帝）棄去して視る勿し。〔馮〕可宗 深く其の冤なるを悉く（細かに知りつくす）も、辭して敢て讞^③（申し上げる）さず。上（福王弘光帝）太監の屈尚忠をして會同し嚴審せしむ（『甲乙事案』卷下・「弘光元年（順治二年）三月丙申（十三日）、下宮眷童氏於錦衣獄」条）。

①宮中の六局の一つの「尚寢局」の「天子の宴寢を司どる」役職の「尚寢」に相当するものか。

②『禮記』文王世子に「獄成、有司讞于公（獄 成るときは、有司 公に讞す：〔取り調べが終わり〕罪状が確定すると、役人が国君に申し上げる）」。

もともと上（福王弘光帝）は、福王（朱常洵）の郡王であり、黃氏を妃として娶ったが、早世した。そして繼妃として李氏を娶った。繼妃の李氏は、洛陽落城の時にまた亡くなった。童氏は、「妃」といったり、あるいは「司寢」といったりしている。以前、一子を生むことがあったが、育たなかった。福王弘光帝が福王府を放棄して南に逃げると、太後の鄒氏と童氏とは、それぞれ人を頼って生活した。太後の鄒氏は南京にたどり着いた。それにあわせて巡按御史の陳潛夫は、童氏のことを奏聞したが、上（福王弘光帝）は童氏を召し出されなかった。そこで、童氏は自分から巡撫の越其杰のところに行った。越其杰は再度奏上した。そうして「詐称である」という詔をうけて、追い払わせた。しかし、自分から南京に行くようお願いしようとした。そして、到着すると、上（福王弘光帝）はたいそうお怒りになり、牢獄に入れた。厳しい取り調べを受けたものの、これまで通りの発言であった。さらに、王府に入ったときの年月日と離れ離れになった事情を詳細に書きつくした。そして、取り調べた馮可宗に、上（福王弘光帝）に伝えてもらうように求めた。ところが上（福王弘光帝）はそれを捨て去って見なかった。馮可宗は、はっきりと童氏は冤罪であることを理解したが、あえて申し上げなかった。上（福王弘光帝）は、宦官の屈尚忠を臨席させて童氏を厳しく取り調べさせた。

そして、文秉はつぎのようにコメントする。

〔發明〕童氏にして果して妃なるや、固より棄絶の理無し。即ち然らずして曾て左右に侍す

る者なるも、亦た下獄の事無し。[『甲乙事案』に] 書して「宮眷」と曰うは、疑うの辭（逡巡した表現）なり。其の妃爲るや、否や。未だ知る可からざればなり。「下獄」と書する者は、之を傷め^①ばなり。[『左傳』襄公十九年に]「婦人 刑無し、刑有りと雖も、朝市に在らず^②」と。先に貧賤にして、今は富貴なるも、「之れ何と謂わん^③（いふべきことも知らない不幸なことである）」と。而して顧だ之を桎梏（拘禁）し、之を桁楊（刑具で拘束する）するのみ。其の罪に假りて以て説かんと欲するか。慘刻なること已に甚だしと爲す（『甲乙事案』巻下・「弘光元年（順治二年）三月丙申（十三日）、下宮眷童氏於錦衣獄」条）。

①疑辭：『春秋穀梁傳』桓公十五年と宣公元年に「疑辭也」とあり、「逡巡した表現」という意味で用いられる。

②『左傳』襄公十九年に「婦人無刑、雖有刑、不在朝市（婦人 刑無し、刑有りと雖も、朝市に在らず）：婦人には死罪以外の刑罰（入れ墨刑など）はない。死罪に処しても市場にさらさない」。

③『禮記』檀弓下に「舅犯日、……父死。之謂何。又因以爲利。而天下其孰能説之……。公子重耳對客曰、……父死。之謂何。或敢有他志。以辱君義……。舅犯 曰く、……父 死す。之れ何と謂わん。又た因りて以て利と爲さんや。天下 其れ孰か能く之を説かん……。公子重耳 客に對えて曰く、……父 死す。之れ何と謂わん。敢て他志有りて、以て君の義を辱しめる或らんや……。）」と。

童氏は果たして福王弘光帝の妃であったのか。[そうでなかったとしても] 捨て去る理由がない。もしもそうではなく、以前に福王弘光帝にお仕えした者であったとしても、監獄に入れることはない。私（文秉）がこの『甲乙事案』で、「宮眷」と記したのは、逡巡した表現である。童氏が妃であったのか、そうでなかったのか、いまだによくわからないからである。「下獄」と記したのは、これを痛ましいと思ったからである。『左傳』襄公十九年に「婦人 刑無し、刑有りと雖も、朝市に在らず（婦人には死罪以外の刑罰（入れ墨刑など）はない。死罪に処しても市場にさらさない）」とある。[福王弘光帝] 前は貧しく、今は富貴となっているのに、いふべきことも知らない不幸な状態になっている。そして、監獄に入れ、刑具で拘束している。その童氏の加えた罪に借りてこれ（童氏が偽妃であること）を説明しようとしているのか。ただ甚だしく残忍苛酷であるといえる。

福王弘光帝のはっきりとした否定にもかかわらず、「其の妃爲るや、否や。未だ知る可からざればなり」と、文秉は考えているのである。

厳密に考えれば文秉の考えの通り「わからない」であろう。しかし、これまで検討してきたように、福王弘光帝の身边で奉仕した女性であった可能性はあるかもしれないが、童氏が福王弘光帝の「繼妃」であったという可能性は低いと考えられる。

李清が「童氏が周王に仕えていた」と伝えていることと、童氏の自供と称するものに出てくる地名が黄河以南のものばかりであることからすると、やはり開封陥落後に、福王弘光帝とではなく、「周王」と何かしらのかかわりがあった女性であった可能性があるのではないだろうか。